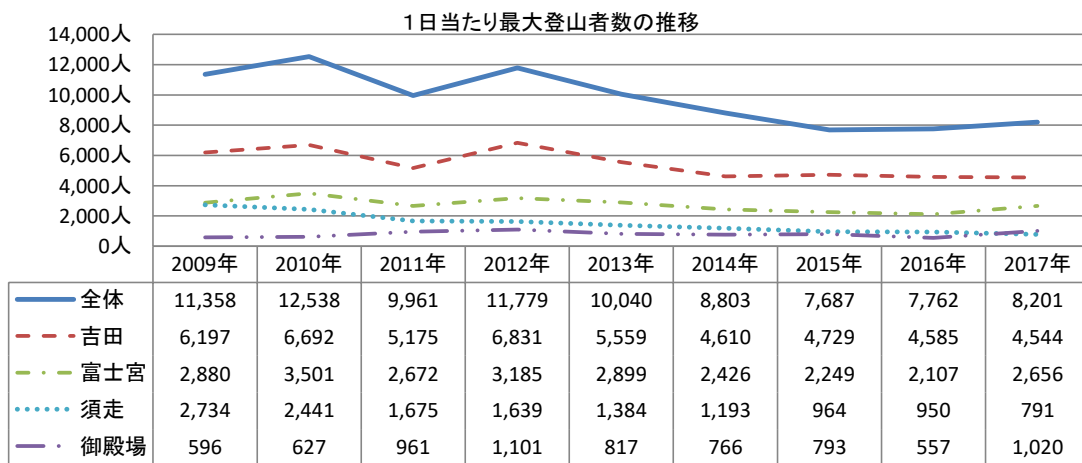


## ＜参考資料4＞登山者数に関する指標・水準の設定

来訪者管理戦略では、複数ある指標の1つとして、「登山道ごとの1日当たりの登山者数」を設定することとしていることから、近年の登山者数の傾向や登山道における混雑の発生状況等を多角的に分析するとともに、地元関係者や登山者の理解・協力が得られるよう検討を進め、登山者数に関する指標・水準の設定を行った。

### 1 登山者数の推移・傾向

- 2017年の全体登山者数は、ピーク時（2010年）に比べ約2割減少（320,975人→248,411人）
- 2017年の1日当たりの最大登山者数は、ピーク時（2010年）に比べ約3割減少。（12,538人→8,201人）



### 2 登山道における混雑の発生状況

- GPSロガーを用いて位置情報や速度等を把握する動態調査を実施した結果、登山道における混雑の発生は、極めて限定的なものであることが判明した。
- さらに調査結果を元に、登山道ごとに特定区間の登山者密度、所要時間等を推計した結果、登山者数の増加に比例して登山者密度の高まりや所要時間の増加が見られることなどを確認した。

### 3 指標の設定

- 来訪者管理戦略では、「登山道ごとの1日当たりの登山者数」を含めた複数の指標を設定することとしたが、登山の安全性や快適性が損なわれるような著しい混雑は、恒常的に発生しているわけではないため、単に「1日当たり登山者数」と表記しても、限定的に発生する混雑の緩和に直結しない上、登山者数を超えた段階で入山規制が始まるものと誤解される恐れがある。
- このため、「特定の日・時間帯・箇所における著しい混雑の緩和」を目指すメッセージが明確に伝わるよう、次のとおり登山者数に関する指標を定める。

【指標】 夏山期間を通じて著しい混雑が発生する登山者数/日を超えた日数

#### 4 目標水準の設定

特定の日・時間帯・箇所での混雑の緩和を目指す観点から、指標に定めた「夏山期間を通じて著しい混雑が発生する1日あたりの登山者数を超過した日数」を減らすことを目標とする。

##### (1) 著しい混雑が発生する1日あたりの登山者数

###### ア 収容力（登山者数）の概念

- ▶ ユネスコ世界遺産センター発行（2002年）の「世界遺産における来訪者管理～世界遺産管理マニュアル」では、収容力を「物理的収容力」、「社会的収容力」及び「生態的収容力」の3つの概念に分類している。
- ▶ 富士山の上方の登山道において、現状では生態的収容力で規定することは困難であるため、主に物理的収容力及び社会的収容力の観点から著しい混雑が発生する1日あたりの登山者数を導出する。

収容力の概念	富士山への適用可能性
<p><b>物理的収容力</b></p> <p>利用可能なスペースとの関係で捉えられる。「設備収容力」とも呼ばれ、宿泊客に提供可能なベッド数、駐車場が満杯となる車の数、キャンプ地におけるキャンプ客数、劇場での座席数等で規定される。</p>	<p>登山者意識調査・動態調査等の研究結果から、登山者密度は、登山者数の増加に伴って高まり、かつ混雑への許容度が低下する関係性が見られることから、社会的収容力の指標である登山者意識と組み合わせることで、収容力導出の根拠となり得る。</p> <p>一方、広大な登山道や山頂部で物理的に収容できる人数は、社会的・生態的収容力を上回る。また、施設・設備の収容・処理能力から収容できる人数は、整備状況に左右されるため、<b>これらを富士山の収容力の根拠とすることは、妥当でない。</b></p>
<p><b>社会的収容力</b></p> <p>心理的、社会文化的なものであり、ある利用スペースにおいて、何人以上になるとレクリエーション体験の質や利用者の満足度が落ちるといった限界値のこと。</p>	<p>登山者意識調査・動態調査等の研究結果から、登山者数と登山道の渋滞、登山者の満足度・混雑への許容度等に相関関係が見られることから、<b>特に登山の安全性・快適性を確保する観点から収容力導出の根拠とする。</b></p>
<p><b>生態的収容力</b></p> <p>生態系が持続可能な機能を維持しつつ、どの程度の人為的干渉に耐えることができるかということ。</p>	<p>五合目以上の登山道は、厳しい自然環境（風雨・融雪）による浸食が発生する箇所が見られる一方、堅牢な溶岩で形成されている箇所では<b>登山行為による影響を受けにくく、また、標高が高くなるにつれて、動植物がほとんど見られないなど、土壌の浸食及び生物個体数等から収容力を導出することは困難である。</b></p>